

令和 5 年 5 月 22 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02268

研究課題名(和文) ヴェーダからポスト・ヴェーダの宗教・文化の共通基盤と重層性の研究

研究課題名(英文) A study of the cultural and religious basis and strata in the Vedic and post-Vedic periods

研究代表者

梶原 三恵子 (KAJIHARA, Mieko)

東京大学・大学院人文社会系研究科(文学部)・教授

研究者番号：00456774

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 14,900,000円

研究成果の概要(和文)：古代インドにおいて、ヴェーダの宗教体系(ブラフマニズム)が紀元前に確立したのち、仏教やジャイナ教などの非正統派宗教が勃興した。また、ヴェーダの内部および周縁から、新しい形の宗教体系(ヒンドゥイズム)が形成されていった。ヴェーダから、非正統派宗教を含むポスト・ヴェーダへの流れの中で、前者は後者に移行し解消したと考えられてきたが、実際にはこれらは並立して存在し、混濁し、互いに影響を与え合っており、現代に至っている。本研究は、ヴェーダとポスト・ヴェーダの宗教・文化の間のこうした共通基盤と重層的な構造を多角的に解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、インド文献学の複数分野の研究者の協力のもと、インドの宗教・文化の共通基盤と重層的な構造に迫った。従来、ヴェーダの宗教(バラモン教)は、形を変えてヒンドゥー教へ移行していったと理解されているが、この両者は現代に至るまで並存し、時に混交しながら、互いに影響し合ってきた。本課題の研究成果は、インドの宗教・文化の構造に関して、文献学のみならず、歴史学、宗教学、社会人類学など、ディシプリンが異なる分野でのインド研究に対しても、有益な視点と資料を提供することができる。

研究成果の概要(英文)：After the Vedic religion (Brahmanism) in ancient India, non-orthodox religious traditions such as Buddhism and Jainism arose. New religious traditions (Hinduism) also emerged within and around the Vedas. From the Vedic tradition to the post-Vedic ones, including non-orthodox religions, it has been thought that the former migrated into and dissolved the latter. However, they have existed side by side, intermingling and influencing each other until today. This study elucidated the common ground and multilayered structure between Vedic and post-Vedic religions and cultures from multiple perspectives.

研究分野：インド学、ヴェーダ文献学

キーワード：ヴェーダ ブラフマニズム ヒンドゥイズム インド 南アジア

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

本研究課題は、梶原三恵子(研究代表者)、手嶋英貴(研究分担者)が研究を分担し、藤井正人(当初は研究分担者、2020年度よりコロナ禍の影響による所属機関の事務的事由により研究協力者に変更)をはじめとする研究協力者たちの協力も得ながら推進する設計で開始された。

古代インドにおいて、儀礼と社会規範を含むヴェーダの宗教体系(バラモン教)が確立した後、仏教やジャイナ教などの非正統派宗教の勃興と前後して、ヴェーダの内部および周縁から、新しいタイプの思想と儀礼をもつ宗教体系(ヒンドゥー教)が形成されていった。ヴェーダから、非正統派宗教を含むポスト・ヴェーダへの流れの中で、前者は後者へと移行・解消したと考えられてきたが、現代インドのヴェーダ伝承地の様子を見ても、本当にそうした一直線の変化がおきたといえるかには疑問がある。本研究開始の背景にはこの通時の問題意識があった。

ヴェーダとポスト・ヴェーダの宗教・文化間の関係を研究するにあたっては、以下の視点を立案した。

- A. ヴェーダと初期ヒンドゥー教との関係。
- B. ヴェーダと初期仏教・ジャイナ教との関係。
- C. ヴェーダとその後のインドの言語・思想・学問との関係。
- D. ヴェーダと後世ヒンドゥー教諸派との関係。

ヴェーダと初期ヒンドゥー教、および初期仏教の関係の研究には研究代表者と分担者があたり、ジャイナ教や後世ヒンドゥー教との関係については研究協力者と研究成果を相互参照しながら、研究課題を進めることとした。

### 2. 研究の目的

ヴェーダの宗教とポスト・ヴェーダの諸宗教は、前者から後者へ移行・解消したのではなく、並存し、混淆し、時代を通じて互いに影響を与え合い、現代に至っている。本研究は、ヴェーダとポスト・ヴェーダの宗教・文化の間の通時のおよび共時的な関係に焦点をあてて、それらが共有する共通基盤と、共通基盤の上に独自の新しい諸要素が層をなす重層的な構造を解明することが目的である。

### 3. 研究の方法

(1) 研究代表者と研究分担者を中心に、複数の研究者が各自の専門に応じてヴェーダないしポスト・ヴェーダの宗教文化を研究し、それぞれの成果を互いに共有した。プラットフォームとしたのは、京都大学人文科学研究所における共同研究班「ブラフマニズムとヒンドゥイズム 南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」である。2020年までは研究分担者の藤井が班長を務め、同人が定年退職して研究協力者となってからは研究分担者の手嶋が一旦研究会を維持したのち2022年以降は後継班「インドにおける『循環的存在論』の形成 祭祀思想から哲学への発展を中心に」を同研究所にて立ち上げた。これらの研究班では毎月、ブラフマニズム(ヴェーダの宗教)とヒンドゥイズム(ポスト・ヴェーダの宗教)ならびに他宗教文化についての研究発表が行われた。本科研課題は、これらの研究班と共同主催あるいは協力共催という形で、毎年2回、東京大学と京都大学とにおいて「ブラフマニズムとヒンドゥイズム」と題した一連のシンポジウムを開催した。研究期間中に本課題が共同主催したものは以下のとおりである。

- 「古代・中世インドの神話、説話、表象」2017年10月7日(土)、京都大学。
- 「古代・中世インドの儀礼、制度、社会」2018年3月24日(土)・25日(日)、東京大学。
- 「古典インドの哲学と学問」2018年10月7日(日)・8日(月)、京都大学。
- 「古代・中世インドの王権と宗教」2019年3月23日(土)・24日(日)、東京大学。
- 「古代・中世インドの社会と宗教」「聖典」の諸相」2020年2月23日(日)、京都大学。

(2) ヴェーダの宗教のうち、研究代表者は家庭儀礼(グリヒヤ祭)、研究分担者は共同体儀礼(シュラウタ祭)およびウパニシャッド哲学と祭祀の関係の主専門とするから、それぞれ初期仏教文献やポスト・ヴェーダ期の叙事詩文献をも参照しつつ文献研究にあたった。各自の研究によって、ヴェーダからポスト・ヴェーダへの宗教文化と思想について、発展・変容の様相と、一貫して変わらずにみられる要素との両者をあぶりだし、これらを総合して研究課題の解決にあたることとした。

(3) サンスクリット語およびパーリ語文献の研究とあわせ、もうひとつの柱としたのが、インドでの現地調査である。南インドのケーララ州中部では、いまなおヴェーダ伝承が良好に保存されている。研究代表者と研究分担者はいずれも、本研究課題の開始前から、サンスクリット語写本探索、ヴェーダの伝統をくみつつ現代の要素もとりにいれられている諸儀礼の観察調査、ヴェーダ伝承とヒンドゥー教の併存のありかたなどについて、同地で継続的に共同フィールドワークを行ってきた。コロナ禍という予期せぬ事態により、本研究課題の期間中にはほとんどインド渡航がかなわなかったが、代替として、これまでに蓄積していた現地調査の成果のとりまとめを行い、研究書を公刊することができた。

#### 4. 研究成果

ヴェーダ、初期仏教、ポスト・ヴェーダ期の文化は、古いものが新しいものにとってかわられてきたのではなく、古いものも受け継がれつつその中に新しい要素がとりこまれ発展していったことが、本課題研究によって確認された。

(1) ヴェーダ伝承が存続している地域では、ヴェーダ文化がヒンドゥー文化に吸収されてしまわず、両者は併存両立している。共同体祭式も家庭儀礼も、コアとなる部分は紀元前のヴェーダ文献にある規定とほぼ同じ形で行われており、さらに、主に儀礼の前後に、より成立の新しいヒンドゥー教の儀礼が行われている。ヴェーダの伝統に基づいた部分については、儀礼作法は紀元前の規定からほとんど外れることがなく、唱えられる祭文もサンスクリット語である。

こうした新旧の伝統の併存は、実践している現地の当事者たちにもある程度意識されている。ただし現地での聞き取りや現地で用いられている現代語の儀礼手引書からだけでは、溶け合っただけで併存しているのか、独立して並び立っているのかは、必ずしもよみとれない。現代社会のありかたは常に流動しているため、安易な理論化は実態を見誤らせるおそれがある。ヴェーダの伝統とヒンドゥー教の伝統の併存のありかたの研究にあたっては、古代のサンスクリット文献の読解研究を基礎としつつ、現地調査を慎重に行う必要がある。

ヴェーダの伝統とヒンドゥイズム(ケーララでは「タントラ」と総称される)の併存が当事者たちにどう捉えられ、ケーララ社会に組み込まれているかについては、研究分担者(途中から研究協力者に変更)の藤井による論考がある(藤井正人 2012「ヴェーダの復興」『コンタクト・ゾーンの人文』第三巻、晃洋書房、270-302)。これをうけつつ、研究代表者はヴェーダ聖典の伝承について、師資相承によるカリキュラムを学派ごとにまとめ、分担者の手嶋はタントラの寺院司祭に関する論考をまとめた。

(2) 代表者と分担者は、口頭発表と論文の公刊にくわえ、研究成果を著書として出版した。代表者が著した『古代インドの入門儀礼』(梶原三恵子著、法蔵館、2021年)では、初期から後期ヴェーダまでのヴェーダ入門儀礼を詳細に検討・分析して全体像を描き出すとともに、シュラウタ祭研究に比べて立ち遅れているグリヒヤ祭研究の一つのモデルを提示した。また、同書の巻末では、初期仏教にみられるもっとも簡素な「入門」の形、すなわち、ブッダが説いた話を聞いた人がブッダその人に弟子入りを直接申し込むという、いわゆる善来具足による受戒儀礼が、ヴェーダ入門儀礼の歴史的展開の延長上にあることを論じた。中期ヴェーダと初期仏教の関係は主に思想面からしばしば論じられるが、本書では、儀礼の面からこれら二つの宗教伝統の共通点と相違点を文献の裏付けをもって指摘したところに、新規性があると自負している。

(3) 分担者が編者となって刊行した『ブラフマニズムとヒンドゥイズム』(藤井正人・手嶋英貴編、法蔵館、2022年、全二巻)は、京都大学人文科学研究所と共催した一連のシンポジウムにもとづいた研究成果である。専門的水準はおとさず、かつ一般にも読まれうるものというコンセプトのもとで、できるだけ原語を引用せず、縦組みで印刷した。第一巻には「古代・中世インドの社会と思想」、第二巻には「中世インドの宗教と実践」との副題を付し、それぞれが示す視点から、ヴェーダ文化(ブラフマニズム)とポスト・ヴェーダ(ヒンドゥイズム)、さらにはこれらの系統に属さない宗教伝統もふくめ、古代から中世にいたるインド文化を多角的に描き出した。

(4) 本研究の主題であるヴェーダとポスト・ヴェーダがカバーする領域は広く、社会・国民の関心を惹く要素も多い。開催したシンポジウムはすべて一般に公開した。また、得られた研究成果を、上述のとおり学会発表、論文・著書の公刊を通して公表するとともに、原語引用を減らした一般向けの論文集も出版し、社会への広報をはかった。出版元の合意が得られた論文は東京大学レポジトリなどで公開しオープンアクセスとした。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計15件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 梶原三恵子	4. 巻 2
2. 論文標題 ヴェーダ聖典学習者と禁欲的修行生活 - ブラフマチャーリンとブラフマチャリヤ	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ブラフマニズムとヒンドゥイズム（藤井正人・手嶋英貴編）	6. 最初と最後の頁 337-371
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mieko Kajihara	4. 巻 30
2. 論文標題 The Observances or vedavratas for Learning of the Veda	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 インド哲学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 1-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002005813	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 梶原三恵子	4. 巻 181
2. 論文標題 パーリ語初期仏教経典における brahmacarin- の語について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 東洋文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 261-278
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15083/0002003755	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 手嶋英貴	4. 巻 115
2. 論文標題 ユディシュティラと仏教的「転輪王」の観念 『マハーバーラタ』第14巻と仏典の転輪王説話との比較	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人文學報	6. 最初と最後の頁 27-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14989/252818	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 手嶋英貴	4. 巻 1
2. 論文標題 「転輪王」觀念の展開：ヴェーダ、仏典、叙事詩	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ブラフマニズムとヒンドゥイズム（藤井正人・手嶋英貴編）	6. 最初と最後の頁 161-185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 手嶋英貴	4. 巻 2
2. 論文標題 「無遮会」とは何か：仏典、ヴェーダ、叙事詩の比較	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ブラフマニズムとヒンドゥイズム（藤井正人・手嶋英貴編）	6. 最初と最後の頁 229-254
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Mieko KAJIHARA（梶原三恵子）	4. 巻 30 & 31
2. 論文標題 The Sacred Verse Savitri in the Vedic Religion	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Journal of Indological Studies	6. 最初と最後の頁 1-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Mieko KAJIHARA（梶原三恵子）	4. 巻 -
2. 論文標題 brahmacarin, brahmacharya, and Chastity in Vedic Literature	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Living Traditions of the Vedas: Proceedings of the International Vedic Workshop 2014	6. 最初と最後の頁 540-554
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 梶原 三恵子	4. 巻 68 (1)
2. 論文標題 アーラニヤカ文献の生成過程の一側面 santi マントラを手掛かりに	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.4259/ibk.68.1_548	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梶原 三恵子	4. 巻 175
2. 論文標題 ヴェーダ文献における brahmacarin の語義 「学生」と「禁欲者」のあいだ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東洋文化研究所紀要	6. 最初と最後の頁 61-103
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15083/00077048	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 手嶋 英貴	4. 巻 110
2. 論文標題 転輪王説話の生成 その始源から「輪宝追跡譚」の成立まで	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『人文學報』(京都大学人文科学研究所)	6. 最初と最後の頁 27-86
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/235918	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 手嶋 英貴	4. 巻 67-2
2. 論文標題 【パネル報告】現代インドにおけるヴェーダ祭式の文化的・社会的プレゼンス ケーララ州の事例から探る	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 印度学仏教学研究	6. 最初と最後の頁 234-235
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 梶原 三恵子	4. 巻 7
2. 論文標題 インドにおけるヴェーダの伝承について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国際哲学研究	6. 最初と最後の頁 51-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.34428/00009791	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 手嶋 英貴	4. 巻 110
2. 論文標題 ケララ州のヒンドゥー寺院司祭・タントリ その職務と家系、ヴェーダ伝承との関わり	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 『人文學報』(京都大学人文科学研究所)	6. 最初と最後の頁 121-147
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.14989/231123	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計20件 (うち招待講演 12件 / うち国際学会 5件)

1. 発表者名 梶原 三恵子
2. 発表標題 アーラニヤカ文献の章構造とヴェーダ学習
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第70回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶原 三恵子
2. 発表標題 アーラニヤカ文献の santi マントラ 「聖典」の形成過程を考える
3. 学会等名 古代・中世インドの社会と宗教 (共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム 南アジアの社会と宗教の連続性・非連続性」第7回シンポジウム) (招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Masato FUJII (藤井正人)
2. 発表標題 Vedic aghala-/akhala-
3. 学会等名 The 7th International Vedic Workshop, Dubrovnik (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 手嶋英貴
2. 発表標題 無遮会のおこり 諸聖典の比較から見えてくること
3. 学会等名 古代・中世インドの社会と宗教 (共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム 南アジアの社会と宗教の連続性と非連続性」第7回シンポジウム (招待講演))
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 梶原 三恵子
2. 発表標題 グリヒヤ祭にみる「伝統」と「慣習」
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤井 正人
2. 発表標題 シュラウタ祭式を継承する力学 バラモン社会と個人
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会
4. 発表年 2018年



1. 発表者名 手嶋 英貴
2. 発表標題 ヴェーダ伝承者たちと儀軌文献 祭式を維持する文化的・社会的基盤
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第69回学術大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤井 正人
2. 発表標題 最初のウバニシャッドはどのように生まれたのか
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム 南アジアにおける宗教と社会の連続性と非連続性」第5回シンポジウム「古典インドの哲学と学問 始まりと展開」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤井 正人
2. 発表標題 王座とブラフマン神
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム 南アジアにおける宗教と社会の連続性と非連続性」第6回シンポジウム「古代・中世インドにおける王権と宗教」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 手嶋 英貴
2. 発表標題 贖罪としてのアシュヴァメーダ
3. 学会等名 京都大学人文科学研究所共同研究「ブラフマニズムとヒンドゥイズム 南アジアにおける宗教と社会の連続性と非連続性」第6回シンポジウム「古代・中世インドにおける王権と宗教」(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 梶原 三恵子
2. 発表標題 インドにおけるヴェーダの伝承について
3. 学会等名 シンポジウム「聖典はどのように伝えられたのか 宗教の言葉と思想を考える」(東洋大学国際哲学研究センター)(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 梶原 三恵子
2. 発表標題 入門儀礼と学習儀礼における衣について
3. 学会等名 シンポジウム「古代・中世インドにおける儀礼、制度、社会」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 藤井正人
2. 発表標題 Vanaprastha and Forest Ascetics in the Dharma and Epic Literature
3. 学会等名 The 8th Dubrovnik International Conference on the Sanskrit Epics and Puranas (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 手嶋 英貴
2. 発表標題 祭馬追跡エピソードの起源 『マハーバーラタ』と初期仏典の比較
3. 学会等名 2017年度第2回FINDAS研究会(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 手嶋 英貴
2. 発表標題 転輪聖王の誕生 ヴェーダ・仏典・叙事詩を横断する人物像の形成
3. 学会等名 日本印度学仏教学会第68回学術大会（パネル）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 手嶋 英貴
2. 発表標題 Yudhisthira as a Sacrificer of the Asvamedha: Conceptual Basis of His Figure in the Asvamedhika-Parvan
3. 学会等名 The 8th Dubrovnik International Conference on the Sanskrit Epics and Puranas（国際学会）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 梶原三恵子	4. 発行年 2021年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 464
3. 書名 古代インドの入門儀礼	

1. 著者名 藤井正人・手嶋英貴（編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法藏館	5. 総ページ数 434
3. 書名 ブラフマニズムとヒンドゥイズム 1 古代・中世インドの社会と思想	

1. 著者名 藤井正人・手嶋英貴（編）	4. 発行年 2022年
2. 出版社 法蔵館	5. 総ページ数 476
3. 書名 ブラフマニズムとヒンドゥイズム 2 古代・中世インドの宗教と実践	

1. 著者名 Hideki Teshima	4. 発行年 2022年
2. 出版社 RINDAS Series of Working Paper 36, Published by The Center for South Asian Studies, Ryukoku University	5. 総ページ数 95
3. 書名 The Evolution of the Image of Buddhist Ideal King “Cakravartin” (Translated from Japanese into English by Translation Team of Editage)	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	手嶋 英貴  (TESHIMA Hideki)  (30388178)	龍谷大学・法学部・教授   (34316)	
研究分担者	藤井 正人  (FUJII Masato)  (50183926)	京都大学・人文科学研究所・名誉教授   (14301)	2019年度まで研究分担者。2020年度より、コロナ禍に起因する所属機関の事務的事由によって、研究協力者に変更。

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	藤井 正人  (FUJII Masato)		2020年度より、コロナ禍に起因する所属機関の事務的事由によって、研究分担者から研究協力者に変更。

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------